

飯田未希著

## 『女たちよ、大志を抱け』

——戦時下、外地で就職する』

評者：堀川 祐里



映画『小さいうち』（松竹、2014年製作）をご覧になったことはあるだろうか？ 山田洋次の82作目となる監督作であり、この作品で主人公の若き日を演じた黒木華は、第64回ベルリン国際映画祭で銀熊賞（女優賞）に輝いた。評者は、本務校の授業で「働く女性の歴史」という科目を担当しているが、女中奉公とは何かを学生たちにイメージしてもらうために、授業の中で20分ほどこの映画を見せている。ただ、学生たちには本来全編見てほしい映画である。それは本作が、生きた時代によって戦時期の日本の捉え方が異なるという学びに満ちた映画だからである。

あらすじを少しだけ紹介すると、この映画は、現代と昭和の描写が行き来しながら展開する。親戚の大叔母である「タキばあちゃん」（倍賞千恵子）を亡くした大学生（妻夫木聡）が、遺品の整理中に見つけたノートには、ばあちゃんの自叙伝が綴られていた。昭和11年、地方から出てきた娘・タキは、東京郊外に建つモダンな赤い三角屋根の「小さいうち」で女中として働き始める。しかし、その小さいうちに、タキが墓場まで持っていこうとしたある事件が起こる、というストーリーである。

この映画では、その自叙伝を書いていた晩年のばあちゃんと大学生のやり取りと、自叙伝の内容であるタキの若き日の出来事の描写が同時に進んでいくのだが、この晩年のばあちゃんと大学生のやり取りの中に、我々が戦時期を理解する際の大事な論点がある。映画の序盤、開始17分ごろに以下のようなやり取りがある。「小さいうち」の思い出を振り返るタキの回想に「私はあの頃のウキウキした奥様達との日々を思い出すと、楽しくなるのです」とナレーションが入る。すると現代の描写に戻り、大学生が「おばあちゃんは間違ってるよ、昭和11年の日本人がそんなにウキウキしてるわけがないよ、二・二六の年だろ？ ダメだよ過去を美化しちゃ、日本はもう戦争してたんだよ、中国と」という。すると、

タキ「支那事変は昭和12年だよ、お前のくれた年表にそう書いてあったよ」

大学生「昭和6年の満州事変からずっと戦争は続いているんだよ、十五年戦争と言って、事変なんて言い方しているけど中身は戦争なんだよ、軍国主義の嵐がもう吹き始めている頃だろ、昭和11年といえよ」

タキ「嵐なんか吹いてないよ、いい天気だったよ、毎日、私楽しかったんだもん」

大学生「あまりにも主観的だよその言い方は、もっと客観的にならなきゃ」

タキ「そんな説教すんなら、もう書かね」

大学生「だから、事実をありのままに書くんだよ、美化しちゃいけないということなんだ」

タキ「美化なんかしてないよ」

と続き、こうして、タキばあちゃんは機嫌を悪くしてしまう。これが、評者が飯田未希著『女たちよ、大志を抱け——戦時下、外地で就職する』を読む際に、読者に理解していただき

たい論点なのである。

本書は既に多数の新聞でも評されており、資料の限られる対象を扱うために、丹念に新聞記事や社員誌、手記などを分析した研究書である。しかし、本文では注釈等の数なども抑えられ、読者にとって物語に入り込みやすい工夫が凝らされている。ここでは、各章について概要を示したい。

序章「戦時期に海を渡った女性たち」では、「これまで戦前および戦時期に海を渡ったと考えられてきた女性像とは、大きく異なっている」存在として、本書では1937年以降、若い女性たちが「都市的」な仕事をするために中国大陸や南方に単独で渡ったことに注目すると述べられている。そのような女性たちは「当時の女性規範から大きく外れ」ており、これまでは注目されなかった（8-10頁）。重要な点は、満州、中国占領地、および東南アジアの占領地に渡った女性たちの多くが就いたのが「民間企業や軍政部のタイピスト、事務職員、電話交換手、日本語教師など、中程度の教育を必要とする仕事」だったことである（14頁）。

第1章「外地へ渡る女性たちを映し出すマスメディア」では、まず内地での女性たちの状況について、特に、都市的な仕事のために外地へ渡る女性たちを新聞がどう捉えたのかを分析する。日中戦争開始以前から職業紹介所は満州での若い女性向けの仕事を紹介していた。戦前、職業紹介所は個別の求人を新聞取材で紹介していたが、戦争開始以降は全体的な求人求職動向を解説するようになり、個別の求人の紹介は行わなくなった。その理由は、第一に、求人数が増えすぎて個別に紹介できなくなったこと、また、職業紹介所の位置づけが変化し、国による人的資源管理のための出先機関となったことである。このように国営となった職業紹介所が女性向けの外地の就職に関わっていたことは、外

地で女性たちが働くことが「変わった女性たちの変わった行動」ではなく、国家が関与したことであったことを示している（81-83頁）。

第2章「なぜ女性たちは外地を目指したのか」では、なぜ女性たちが外地に向かったのか、という女性たちの選択の意味について、彼女たちを取り巻く社会的状況から考える。女性たちの外地認識として、戦時期には外地が「観光地」でもあったことを指摘した。日中戦争開始前後から景気が回復するにつれ、外地が「戦地」ではなく「観光地」として旅行パンフレットに掲載されることがあった（88頁）。「一種の体験型ツーリズム」のような感覚で外地を見物したいという女性たちがいた（95頁）。同時に、女性たちの内地での息苦しさから脱出する場としても外地は位置づけられた。挺身隊の結成、工場への動員、「ぶらぶら」と「華美」な生活をしていないか、結婚はしないのかという干渉から脱出するために、「大東亜共栄圏」という戦時レトリックを最大限に利用して、未婚の中流女性が自分のために脱出していったのではないかと指摘している（123-124頁）。

本書の後半は、外地に出た女性たちの経験について分析され、第3章「中国大陸に渡る」では大陸で女性たちがどのような仕事をしたのか論じられている。南満州鉄道株式会社（満鉄）と華北交通株式会社（華交）の社員誌を中心に女性たちの状況と職場に対する認識が分析されているが（131頁）、この2つは企業規模も大きく、雇用される女性たちの職種と働く地域にも多様性があった。社員誌には彼女たちの意見が多く誌面に載り、彼女たちの仕事が「気抜け」するようなものであったことがわかる（135-136頁）。つまり、幹部社員たちは国策に従って女性の職域拡大を説き、女性の仕事の重要性を主張したが（139頁）、実際には内地と大して違いのない仕事をするることになり、しか

も内地では小学校卒の女性が就いた仕事を高等女学校卒の女性たちが担う状況があった。また、タイピストはタイピストプール（大規模なタイピストの部屋）で集中管理され、内地よりも職場の女性の地位が低下していた（155-156頁）。比較的情勢が安定した小康状態の時期の満州や華北では、旧来型の「女らしさ」を期待され、外地の職場の方がジェンダーに関して保守的であった可能性があった（168頁）。

さらに、第4章では、「満洲の女」という表象について検討している。「満洲の女」とは、戦時期に海外に就職のために出ていった女性たちに対する見方を象徴する言葉であり、「享乐的、奢侈的で性的に奔放な女性」というニュアンスを持っていた（176頁）。満蒙開拓団などとして不安定な地域に入職する男性たちに対しては「大陸雄飛」などの言葉で称揚したこととは、意味づけの非対称性があった（181-182頁）。「満洲の女」という偏見は、モダンガールや職業婦人とも共通するイメージであり、さらにその上に行く大胆さを外地の日本人男性側が受け入れられなかったことを示している（185頁）。また、中国人男女は、日本人男性のもつ封建的思考を批判的に捉え、日本人の男女が対等ではなく、「人間的な」関係ではないと考えていた可能性を著者は論じている（201-202頁）。

第5章「南方へ渡った女性たち」では、南方に渡った女性について、その時期と地域、仕事の内容について述べている。アジア太平洋戦争が始まると、戦争によって日本軍が占領した地域である、インドネシア、シンガポール、マレー半島、フィリピンなど「南方」と呼ばれた地域にも女性たちが渡航した（207頁）。女性たちは軍属として、もしくは軍が進出を許可した民間企業で働いた。女性たちが活動した期間は、1942年半ばから終戦後1、2年ほどの短い

期間である（208-209頁）。広大な南方占領地のほとんどの地域に、若い女性たちが都市的な仕事のために渡っていた（217頁）。この当時、多くの人々は渡航ルートの海域が戦場になっていること、そして日本が劣勢であることに気が付いておらず、船が沈没していることにも注意しなくてはならない（218-221頁）。渡航した人々は、故郷よりも南方の都市の方がはるかに近代化されていたことや、働く人々の多様性に衝撃を受けた（223-224頁）。南方に宣撫のために渡った女性には「日本婦道」を現地の女性たちに伝えることが期待されたが、多くは理念的なことまでは教えなかったようである（247頁）。

第6章「戦地で働く女性たち」では前線であった中国大陸の河南地域で働いた女性軍属の回想記をもとに、女性たちの経験を分析している。電話交換手という仕事を、華交と軍隊で経験した女性の視点を通じて違いを論じている。第3章に論じられた華交では通話時間の長さが問題となっていたが、軍隊での電話の特徴は通話時間が短いことであり、短時間で電話を済ませるには交換手の協力が必要であった。加えて、交換手が軍人から暴力を振るわれることもあった（261-263頁）。「兵隊並み」に働こうと渡航してきた女性たちは、朝鮮人慰安婦の女性たちを見て、「兵隊さんへの失望」を感じ、「同性」として朝鮮人女性たちに同情し共感した（272頁）。また、「満洲の女」イメージは軍人にも広まっていたと推測され（275頁）、内地の女性たちにも、大陸に働きに行く女性たちを「素性のよくない女」としての偏見を持つ場合があった（277頁）。

終章「『脱出』の行く末」では改めて、外地に渡った女性たちがなぜ忘れ去られたのかについて検討している。外地で働く女性を称賛するニュースは、内地から脱出することを希望する

女性の気持ちを後押しし、女性たちはどうすれば外地で仕事を見つけられるかを考え行動した。新聞は家族を説得する材料ともなった。しかし、実際に女性たちが満州や占領地へ渡ると、女性たちは性的な存在として、「内地の古い職業婦人イメージ」で捉えられるようになり「満州の女」をはじめとしたイメージが付きまとった。それは、家庭内にとどまる「良妻賢母」とは正反対の存在としてイメージされた(281-283頁)。また、外地に働きに出た女性たちの「視点」を考えると、必ずしも「日本人男性」と「日本人女性」は同じ立場からものを見ていなかった。日本人女性たちは日本人男性に従属した立場であったからこそ、同じように従属的な立場にある現地人男女の状況にも敏感になった(289-290頁)。

現代に生きる我々が戦時期の日本を評価するのは非常に難しい。評者は、2025年12月に歴史学会第50回記念大会のシンポジウム〈戦時下における女性と子ども〉に、パネリストとして登壇の機会をいただいた。その際の重要な討論テーマは、戦争における被害と加害であった。これは、評者が大学院生の頃から格闘しながらも、未だにクリアな持論を持てずにいるテーマでもある。映画『小さいうち』のばあちゃんと大学生の話に少し戻ると、現代を生きる大学生からすれば、戦時期の日本をキラキラした良い思い出だと語るなんてもってのほかである、という理解はもっともだともいえる。しかし、歴史に沈潜すれば、その当時の日本における「平和」の理解に則って、あくまで日本が「平和」を求めている時代の話だったといえる。当時を生きた当時の若者の目線から、その世の中で、あくまで当時の若者が出来た「ふつう」の生き方や暮らしの在り方を思い出していただけなのだ。

そのような理解から、本書の特筆すべき点を

述べれば、まず1つ目は本書が歴史に沈潜するという読書や研究の在り方、つまり、その当時の人々の目線に立って考えることの重要性を示している点である。著者が重要視するのは、当時の日本人の認識した「日本」の範囲についてである。著者も「外地に対する認識と外地への距離感」(290頁)と強調するように、戦時期の人々は、外地を「起業や就職が可能な場所」として認識していた。当時の女性にとって「女性も働くことができる場所」であり、安全だという前提のある「観光地」でもあった(291-292頁)。しかしながら、現在の私たちには想像しがたいため、本書で焦点を当てたような外地に就職した女性たちが不可視化されてきたと、著者は終章で結論づけている。また、「移民が当たり前であった社会の地理感覚」も重要であり、外地で仕事を探すこと、外地に出ていくことは、現在私たちが想像するよりもずっと「ふつう」のことだったことも指摘している(292-294頁)。

本書の特筆すべき点の2つ目は、「一見『例外』に見える女性たちの経験を歴史的なコンテキストに位置づけなおすことで、彼女たちに見えていた世界を考え、彼女たちの選択の意味を探ることを試みた」点であろう。著者は序章でも「多くの女性にこの時期、職業に『働き甲斐』を求めるような気持ち、さらには海外に出て自分の力を試したいという気持ちが生まれていたという、この状況自体が何かということを考えてみたい」また、「そのような女性たちの熱い気持ちが、どのような社会環境、歴史的コンテキストの中で可能になっていたのか、さらに、仕事を求めて海外に渡った女性たちは、外地で働く中でどのような経験をしたのかを考えてみたい」と論じている(15-16頁)。「そうした女性たちが何を求めていたのか、そして彼女たちは外地で働く中でどのような経験をしたのか」

(18 頁) というところに、まさに著者が、当時の女性の目線に立とうとしていることを感じる。このことは特筆すべき点の 1 点目にも通じる、本書の特徴である。

評者は近年〈個人史とジェンダー史の交差〉について検討している。2013 年 12 月 9 日に一橋大学で行われた、シンシア・エンロー氏の講演「Can One Make an Academic Career and Keep One's Feminist Soul?」の序盤で、エンローは皆様のお母様も「歴史の一部であった」と語った。そのうえで評者が興味深かったのは、エンローが今となっては彼女の母の特殊性を考察できるが、彼女が生まれ育った時には母の生き方を「普通」のことだと思っていたという事柄であった<sup>(1)</sup>。評者は自身の研究テーマの生理休暇について、生理休暇要求が始まった 1927 年からの 100 年間の歴史に、それぞれの時代で様々な属性に生まれた女性たちの人生のタイムラインを重ねると、世代によって、属性によって、生理休暇に対する見え方や捉え方は変わると考えている。本書で著者が貫いた問題意識は、まさにこれに通じるところがあり、戦時期の出来事もそうなのだ。そして本書で論じられた女性たちも歴史の一部なのである。歴史に沈潜することの重要性と共に、少数派の生き方を「例外」として不可視化して個人史のみに回収してはならないこと (294-297 頁) を著者は強調している。それは、これからのジェンダー史の深化のために、重要な問題提起である。

しかしながら、本書において著者にもう少し踏み込んでほしい、もしくは書き分けてほしいと感じたところは、本書の内容を今、社会に問う意味、もしくは現代社会の人々にどのような行動変容を促すかという著者の見解である。本

書はおそらく、歴史に沈潜する、という感覚を学ぶという前提のないまま読み進めると、少々勘違いのメッセージを与えてしまうことがある。それは、著者が、戦時に外地に就職した女性たちが「非常に能動的であった」と評価していたり、女性たちが「『お国のため』というイデオロギーメッセージを利用して、自分のために外地に脱出した」(295 頁) と彼女たちの積極性や野心のようなものを比較的肯定的に捉えていたりするところに、ほんの少しの不安を覚える人がいるのではないか、という懸念である。

著者が書いている通り「戦時期に起きたことを戦争に還元する歴史認識以外の枠組みがあっても良いのではないか」(296 頁) という指摘は、評者もよく理解できる。第 3 章に論じられたように、「お国のため」の覚悟で渡航するのには「かなりの思い切り」が必要だったはずであり、また、著者も「面白い」と評価しているように、社員誌において、「この時期の女性たちは、おそらく現在の女性たち以上に自己主張をし」、「職務上の男女平等とは何かについてかなり積極的に発言している」。社員誌を通して他の職場の女性たちの意見を知り、「自分の感じる職場での憤りが自分だけのものではないと理解」して積極的に意見文を書いた、というのは注目すべき事実である (167 頁)。現代社会の若者にも手本にしてほしい。

ただし、本書のタイトル『女たちよ、大志を抱け』が持つ強いインパクトは、例えば、現代において日本がかつておこなった戦争を肯定する書籍であると認識されてしまったり、肯定するとまでは言わないまでも、今後の世界でも、自国が戦争によって侵略をしようとも、個人に自己実現をする元気があれば良いのだと

(1) 堀川祐里 (2025) 「現代日本における女性労働者のセクシュアル・リプロダクティブ・ヘルス/ライツ——生理休暇要求から 100 年を目前にして」『経済学論纂』66 (1-2)、中央大学経済学研究会、148-149 頁。

いったメッセージであると理解されてしまった  
りしないだろうか。それはおそらく著者の真意  
ではないと思うので、著者には、現代を生きる  
我々が、当時の女性の外地への就職を知ること  
を、未来にどのように活かしたら良いか、是非  
意見を示してほしい。

先述した通り、戦争における加害と被害とい  
うテーマには、評者自体がまだクリアに答えら  
れず日々頭を悩ませている。しかし、まず1つ  
だけ現時点でたどりついていることは、教育内  
容や情報入手の水準や方法が戦時期とは全く異  
なる現代を生きる我々が、真空空間で、つま

り、人々の生活にまつわる諸条件の比較なし  
に、当時の日本人を断罪してはならないという  
ことである。ただし、歴史研究は未来の社会の  
ためにあるべきである。本書は、今、私たちが  
女性と戦時期というテーマを改めて考える時期  
に至っていることを、世に問うきっかけを与え  
てくれる重要な1冊である。

（飯田未希著『女たちよ、大志を抱け——戦時  
下、外地で就職する』中央公論新社、2025年9  
月、301頁、定価：本体2,250円＋税）

（ほりかわ・ゆうり 和光大学経済経営学部准教授）